

その後、抑留所もだんだん水が引いて、そこを畑にしたり、音楽堂を建てたりした。各種の職業の人がいて共同、自活の生活をしたが、現地人の話では雨期の間、奥地の雨で「メコン・メナム河」が氾濫し、付近一帯は泥水・沼地となるとのこと、我々はその雨期に出合ったわけです。

抑留生活約八ヵ月、昭和二十一年六月三十日、「辰日丸」でバンコク出港、七月十一日、鹿児島へ上陸したのです。

兄は帰国後、京都で歯科医をしていた。生涯二度と経験することはないであろう辛い長い旅路を重ねて、死を超越した力で国境を越えた兄弟二人、その兄も昭和五十九年に他界、生前この苦しい体験を、本にして出版することが兄の念願でした。私はそのため兄に代わって資料を整理しております。現在ビルマはミャンマーといっています。

ビルマの助人 狼兵団の初年兵

大阪府 二場 義照

―二場さんお若いが、志願兵だったのですか。

いや、大正十二年二月二十二日生まれで、十八年徴集、十九年三月十一日教育召集されたのです。それでは、ここに私の略歴がありますので、一寸読んでみます。

昭和十九年五月二十七日動員下令、六月九日編成完結。第四十九師団第百六連隊通信中隊編入。六月十二日門司港出帆。十四日竜山着。二十九日ビルマ派遣のため竜山出発。

七月三日釜山港出発。同日南方軍総司令官隷下に入る。十九日シンガポール上陸。二十八日同地発。八月三日サイゴン着。八日同地出発。十六日仏印泰國境通過。九月二十日バンコク発。二十九日泰緬國境通過。十月九日ビルマベグー着。同日より十二月三十一日まで

で断作戦参加。二十年一月一日より四月九日盤作戦参加。十日より五月三十一日克作戦参加。七月五日第四十九師団通信隊へ転属。六月一日から八月十四日まで作戦参加。二十一年七月復員。

―それではビルマ着からの盤作戦について話をして下さい。

十九年九月末頃かと思うが、ペグー県チャウタン（ラングーまで二十キロぐらい）に着いたのです。我々初年兵には判らないが、何個師団もの兵がインパール作戦から撤退する。ビルマには主幹道路を除いては道が無い。あるのは間道みtainのだけ。ペグーに行く主幹道路がメイクテラへと通じている。

各師団が奥地から撤退してくる。英印軍の第二戦軍団に包囲されて、メイクテラはニッチもサッチもいかなかったようです。そこで我々の第四十九師団を救出作戦に出した。二十年一月一日から、これが盤作戦ですが、昼は走れない。敵機が来るからです。

夜五時半頃から、朝方五〜六時ぐらいまでしか道路は走れない。昼は山の中に隠れていて、二日間走った。

トングーからメイクテラまで行くが、とにかく退却してくる部隊が包囲されてしまっている。そのため敵の背後から救出したわけです。

ある本に我々兵団のことを次のように書いてある。

「十九年夏、第四十九師団（諜号狼）がビルマに進駐「狼が来た」と喜ばれ、劣勢となった各師団に代わって、メイクテラでは英大戦軍と激戦、第五百十三連隊（本隊と離れて独立部隊として戦っていた）はほとんど全滅した。」

これがメイクテラの救出作戦です。（一万二千人の兵力中戦没者八八百人）

これからが、毎日毎日の戦闘なのですが、私にとって悲しいことがあったので、その話を中に挟んでよいですか。

―結構です。家庭のことですか、細かくお話をして下さい。

先に申しましたように、私の連隊の運が良かったことは、ビルマ方面軍の予備軍でした。虎の子の予備隊だったのです。泰との国境を越えてビルマに入ってシ

ッタン河を渡ってペグーへ来た。それが十月九日頃だったと思いますが、チャウタンで警備していた時だったか、十月何日だったか、私にとつてはとても悲しいことがあった。

出征当時の家の事情ですが、父は若かったが、高血圧、肥満体ながら三井炭鉱へ勤めていたのです。しかし、十九年一月佐世保工廠へ徴用されたのです。私は三月に招集されて、後に残ったのは母と小学校一年生の弟、二歳の妹でした。その当時はそんなことはざらにあったことで、別にどうということではなかったのだが。

ところが、チャウタンで無学の母からの手紙を受け取ったのです。「父は立派にお国のためお役にたった。貴方も一生懸命お国のために働いてくれ。」ということだけ書いてあった。父が死んだとは書いていないが、母は戦地へ出すので、それを国のお役にたったと涙を飲んで表現したのでしょうか。私もやらねばならぬと考えていた。

しかし、うれしいことに戦友も励ましてくれ、

四時半ごろ、私がドラム缶風呂を沸かしているとき、わざわざ小隊長が来られ、励ましの言葉を頂いた。教練以外の時に小隊長から言葉をかけて貰うことはないもので、このことが軍隊で一番うれしかったことです。

「中隊長も考えている。二場悲しいかろうが、軍人として頑張ってくれ」この言葉は忘れなかったが、それから先は苦労だけ、特に初年兵だったので辛いことばかりだ。

もし私が父に代わって先に召集されていたら父も徴用されることも無かったのにと思います。死なずに済んだのにと随分悩みましたよ。でも、そのような悲しみは、出征兵士の留守宅にはざらにあったことなのですから。

―その悲しみを胸に秘めながら、初年兵として、しかもビルマの負け戦の助け人部隊です。毎日が生死の戦でしたでしょう。

進攻作戦でしたら補給もあり、勢いもいいのだが、收容作戦とは逃げる作戦です。弾薬も食料も薬も無い。敵の死骸から手榴弾を取って戦うのだから弾薬の量な

どされている。しかも敵の弾は銃の口径が合わないの
でつかえない。

それから毎日が戦闘ですが、昼は空からも、戦車か
らも圧倒的な物量でやられる。こちらは対抗する武器
弾薬が無い。仕方ないから夜陣地を移動する。陣地と
いうのは山際の部落で、とても幹線道路にはおられま
せんから。しかし、敵は夜には照明弾を投下してくる
ので、陣地といっても塹壺を掘るだけです。

一月、二月の乾期で、我々の連隊は敵の背後から行
って他の師団を助けたわけ。我々も押されて押され
下った。これがいわゆるメークテイラーの救出作戦で
した。撤退兵団の名は判らないが、鼻歌を歌いながら
ドンドン来るのもあるし、気の毒なくらいよぼよぼに
なって下って来る部隊もあり、それらを援護するのが、
部隊の任務でした。

メークテイラーのことですが、一月三日に着いてび
っくりした。大きな街が瓦礫の山、まともな家が一軒
も無い。戦後知った広島原爆の跡のようだった。

一二場さんの周囲というか、身辺に起こった戦況や

ご苦労を話して下さい。

ビルマの地形は多くの山脈があり、山地やジャング
ルが多い。道は車が通れるようなのは幹線道路だけ。
だからその道路を中心に大部隊が下って来て、メ
ークテイラーの方へ集まって来た。そこを包囲して
行く。それを援けるわけだというのは前にも申しました。
私は連隊本部と行動をするのだが、初年兵だから毎
日ウロウロするだけで、よく様子は判らぬので敵との
距離はどのくらい判りません。連隊の鈴木中隊長が
前線から来た時、うちの小隊長が「〇〇中尉は健在で
すか」と言うと、「昨日、戦死した」とかのやり取り
を聞き随分緊迫した空気を感じていました。敵味方の
重機関銃の音も聞こえていました。

双胴のP38戦闘機が毎日三十機ぐらいがラングーン
の方へ飛んで来る。昼間は銃爆撃してくる。しかし、
日本機は一機も見えなかった。

夜は日本軍の夜襲を恐れて盲射してくる。照明弾を
射って昼間のようにする。またゲリラが連合軍へ通報
するので、何処にいてもやられる。こちらには弾が少

ない。「敵に応戦するな、射つのは白兵戦の時だけ」と命ぜられている。

困るのは食べる時間（食べる物も無いのだが）や寝る時間が無いことだ。昼間は幹線道路を挟んで一〜二キロぐらいの部落に小隊毎に分かれて昼寝する。戦車部隊が攻撃してくるが、弾は射てない。速射砲が「夕弾」（独の対戦車弾）を射つが中々当たらない。敵戦車は三〜四百メートルぐらい前方に二両ぐらいつづ来るのだが、我々歩兵の壕は五十センチぐらいしか掘れない。敵の弾は予め標定してあるのか照準がしており、比較的正確である。しかし、日本軍の爆薬を持った肉弾攻撃を恐れ余り突っ込んでこない。だが、こちらが反撃しないとどんどん来る。弾薬の消耗が激しいが、火力は違う。こちらは弾薬補給（小銃、手榴弾）が無いから、三十メートル以内で射つ。白兵戦の前に射つだけ。

次に三月二十三日の戦車に包囲された戦闘の様子を話します。

十時頃、戦車がそこまで来ている。壕に入ったのだ

が、生き残った本部の野崎少尉が「これからは自分が指揮をとる」といわれ、我々はその指揮下に入ったのです。チーク材を四段ぐらい上に載せてトーチカのようにした。大きい壕なので、戦車は落ちてしまうので踏み込んで来ない。十二時頃有線兵二名が逃げて来た。「ここに入れ」と壕に入れた。

手榴弾戦が三時間ぐらい続いたが、そのためチーク材が燃え始めた。このままでは壕の中で焼け死ぬので突撃をすることになった。ところが、敵が何処にいるか判らない。一人でも相手を殺そうと、有線兵二人が壕からでて十メートルぐらい先で直ぐに射たれて即死した。そこで、焼けた所を剣で削って燃えるのを防いだ。その間、山本上等兵と同年兵の二人が胸に弾を受けたが幸いに心臓をはずれていた。

出るに不出られぬので、手榴弾で追い散らし、夜になって外へ出た。敵が二人の戦死者の物を取りに来たところを二人射殺した。殺すか殺されるかである。

六時過ぎ壕を出たら、ほとんどやられてしまっていた。残ったのは十四、五人のみ。中隊長は連隊長の所

にいて助かった。負傷した有線の現役兵が「水をくれ、水をくれ」といったが水を飲ませると死ぬというのでやらなかった。鈴木中隊長が「やれ」というので飲ませたが、やはり後で死んだ。中隊長はもう助からぬだろうから「末期の水」を飲ませろといったわけです。

私は壕の上の手榴弾が破裂し額をやられ、血が流れていた。たいしたことは無いと思っていたが、十日ぐらいたら顔が「お岩さん」(四谷怪談)のように化膿していた。その後傷が何かに当って破れたら、膿がドッと流れ出した。そのため中隊長の命令で野戦病院に下げられたのだが、通信隊百二十名ぐらいが十数名になった。他の輸送隊を含めても四十余名のみしか生存していない。とにかく私も三月二十三日までは生き残ったことになった。鈴木中隊長は二十五日に戦死をされたことを後に聞きました。

私は下って三日目、野戦病院で治療してもらったが、手術をする時「お前は若いから顔を切つて傷つけては可哀想だ。モルヒネは他の重傷者に使わなければならぬから辛抱せよ」という。軍医一人が私に馬乗りし、

口にタオルを噛ませ、衛生兵一人が足を押さえ、一人が手術する。眉の上から手榴弾破片を抜き取った。ピンセットで引つ張るのだが痛いこと痛いこと。でも日が経つに従いだんだんに回復してきました。その時負傷した親戚の者に会い自分の宿舎に入れ、その者も生還することが出来ました。

二日したら敵の戦車が攻めて来るというので、歩ける者はトングーンへ下がれと、メークテイラーからトングーンと三百キロ下ったのですが、その間傷には蛆虫がわいていたので、途中菊兵团(第十八師団)の軍医に治療してもらい第百三十三兵站病院へ入院したのです。

傷が癒ったため速射砲(対戦車砲)隊へ編入され、装具は新しい物をくれた。いよいよ五キロぐらいの所に迫つて来た敵の戦車を防ぐ命が下った。その晩七時頃、速射砲隊へ行ったら「第四十九師団(狼)通信隊が来るから合流せよ」との命令が来て、二十時頃やつと部隊と一緒に助かったわけだ。

二十一年四月二十三日、マラリヤで第四十九師団第

四野戦病院へ入院、六月二十九日と思うが復員船に乗って、九死に一生を得て、かつビルマの助っ人の一兵士の任を完うして、懐かしい家へ帰りました。

今は恩欠連大阪府連吹田支部長として、戦友のため努力していますが、同時に未だに遺骨が帰らぬ亡き戦友の御冥福を祈っております。

ビルマにおける俘虜生活

長崎県 赤田 恒雄

私は昭和十八年十二月一日現役兵として、大村西部第四七部隊に入隊しました。

入隊後約二ヵ月、一般の初年兵同様に初年兵教育を受けました。二ヵ月後憲兵を志願して採用され、クアランプール南方軍憲兵教習隊に転出し出征することになりました。

教習隊における教育期間は四ヵ月で終了しました。教育終了と共にビルマ地区憲兵司令部に配属が定ま

り、ビルマ・ラングーン憲兵司令部に赴任し、三ヵ月現地における憲兵教育を受けた。その後、マンダレー憲兵隊に所属することとなりました。

マンダレー憲兵隊は山下憲兵少佐殿を長として約五十人位の憲兵が勤務していました。当時の私の階級は伍長で、終戦時軍曹に進級しました。

憲兵隊の日常の仕事は、ビルマ住民のスパイ活動を摘発するのが主な仕事でした。ビルマにおける住民感情は、占領当時から大分様相が異なっており、日本軍の旗色が不振に傾くとだんだん悪化して参りました。

服務は通常私服で、しかも住民に扮して頭にターバンを巻いて、腰にロンジーを巻き、足は草履の様な履物を履いて、十四年式拳銃を腰に隠し、言葉もなるべくビルマ語を使用し、現地人になり切った服務でした。

二十年七月頃、マンダレー方面の前線から後退して来た「菊」(第十八師団)「竜」(第五十六師団)の両部隊に追尾して敵の機甲兵団が接近したので、憲兵隊は河船(カヌー)を利用して脱出、モールメンにて終